

【団体について】

- ・ビジョン：生まれ育つ環境に左右されず自分の未来に希望が持てる社会
- ・ミッション：子ども若者が安心して力を発揮できる地域のプラットフォームをつくる
- ・活動の方向性：地域住民・企業・大学などと協働し、活動に参画していただく。子ども若者が経済的なハードルを越えて地域資源を最大限有効活用できる状態を目指す。

【事業の目的】

不登校や不登校経験者など生きづらさを抱える子ども若者や学校・家庭以外の居場所を必要とする子ども若者に対して、地域で居場所支援・学習支援・暮らし支援・相談支援などを行う中で、自己実現に向けた将来の自立に寄与する。

【1】2021 年度の取り組み

(1) 居場所づくり支援事業

(ア) 居場所づくり活動

—毎週金曜日 14 時～16 時 年間開催回数 48 回、参加者数延べ 263 名

学校に行きにくい、またはその傾向のある小学校高学年から高校生、高校中退や若年無業の若者が集い、ボードゲームや卓球など遊びを通したコミュニケーションをおこなった。ひきこもりがち子ども若者が家の外に出る練習として利用するケースや、社会福祉サービスを利用する前段階の他者との交流の場として利用するケースが見られました。

日中の時間帯の居場所では、落ち着いた雰囲気が心地よく利用しやすいという声があった。発達障害やその傾向があり、聴覚過敏や大人数が苦手な子ども若者も来所しやすい、少人数の場づくりをおこなっています。また、活動できる部屋を増やすことができたため、途中で休憩したり、クールダウンをしたり、またプライバシーを守って話したりする場合に部屋を移動するなど、臨機応変な個別対応に取り組むことができるようになりました。1～2 名用の簡易テントを用いて、パーソナルスペースを確保するなどの工夫も取り入れ、一人ひとりのペースやニーズに合わせて居場所を利用できるようにしました。



(イ) スポーツ・レクリエーション活動

一年間開催回数 10回 参加者人数延べ104人

卓球やダンス、バドミントンなどスポーツやレクリエーションをおこないました。新型コロナウイルスの感染状況により、屋内でのスポーツ・レクリエーションは一時中止を余儀なくされましたが、近隣の公園に行き、バドミントンをおこなったり、なわとびで体を動かしたりしました。子どもたちのなかには、学校に行っていない状況のなか、家庭のなかでも体を動かしたり、他者とスポーツやレクリエーションをおこなう機会が減少している傾向があり、参加者からは、久しぶりに体を動かしてとても楽しい。一人でスポーツはできないのでおもしろい。などの感想がありました。



(ウ) もものバー 地域住民との居場所づくりプロジェクト（小屋の改修）

中学卒業とともに居場所を離れ新しいコミュニティに移行していく子どもたちも多くいます。中には、いつのまにか高校に通うことができなくなり、中退していたり、アルバイトが続かず家に引きこもりがちになっている若者もいました。どんな状況の時にも、気軽に立ち寄ることができる場所、自分の話を聞いてくれる大人がいるという環境をつくることで、子ども若者の孤立を防ぎ、適切な伴走支援をおこなう機会をつくりたいと考えました。

—2021年4月～7月離れの掃除やワークショップの実施 協力者人数延べ102名

「相談の敷居をさげること」を目的に当団体の敷地内にある離れを、子どもも立ち寄ることができるバーに改装しました。古い離れの掃除や内部の解体などには、地域の方々も協力していただきました。また、カウンターテーブルやスツール（椅子）、扉や窓などの塗装などをおこなうDIT(DIYのみんなで協力して行う形式)にチャレンジしました。夏休みの2日間をかけておこなったワークショップで、もものバーが完成しました。その日の夕方には、もものバー完成を祝う夕焼けコンサートを開催し、協力してくださった地域の方々や子どもたちとその家族など多数の協力者が集まりました。離れの改修に関して延べ100名以上のボランティアの方々が協力してくださり、2021年8月31日にもものバーをオープンすることができました。

—2021年8月～2022年3月

もものバーは、誰でも利用することができ、子ども若者は軽食や飲み物も無料です。週替

わりのメニューを楽しみに通う中学生や高校生が増えていきました。誰かと話してもいいし、ぼーっと過ごすだけでもいい。自分が心地よいと感じる方法で利用できる場所にすることを目指しました。夏休み明けに子どもの自殺者数が増えることから、夏休み中にバーをオープンし、一人でも多くの子ども若者が立ち寄ることができる、かけこむことができる場にしました。

マスターとして、ほどよい距離感で話を聞いたり見守ったりするスタッフや、ボランティアとして活動を支えてくれる学生や社会人の方も増えました。支援する側・される側という立場を感じさせない雰囲気づくりにも取り組んでいます。

いつでも個別の相談をおこなうことができるように、別室を用意し、利用者から希望があった場合には個別面談や支援機関との連携をおこなうようにしています。利用者一人ひとりのペースで話ができる仕組みづくりを大切にしています。



(2) 教育支援事業

(ア) 文化芸術ゼミ

2021年6月～2022年3月 隔月1回 合計6回開催 延べ参加人数 53人

美術系・芸術系の大学や専門学校への進学を希望しているが、不登校状態であることや経済的困窮状態にあることが要素となり、進学がかなわないという相談を複数の高校生や若者から受けてきました。どのような背景に育つ子ども若者にも、地域のなかに文化的教育の場がある環境を創出することで、文化芸術の経験や学びを通し、子ども若者本人が持つ可能性をや力を発揮する社会につながるという仮説を立てました。

中学生から高校生、若年無業の若者、一度は進学をあきらめて就職した若者が参加し、ワークショップや座談会をおこないました。絵を描くこと、造形物をつくることや自然の中で見つけた様々な景色を通して、自分が感じたこと、考えたこと、表現したいと思ったことなどを言語化する過程を経験しました。そして大好きなことや夢中になれること、あきらめたくないことなどを整理し、自らの過去・現在・未来のことを語れることを目指しました。様々な文化芸術の体験や講師をはじめ参加者同士の出会いを通して、新たな知的好奇心やコミュニティと育み、活躍の場をつくることができました。

活動内容…ドリームボードづくり(6月)、自然の中で見つける私の秋を見つけよう(9月 フィールドワークと作品制作)、対話型文化芸術ゼミ(11月)、マイカレンダーづくり(12月)、春を待つ 花々を描く(2月)、陶芸作品づくり(3月)



(イ) 学習支援教室

2021年9月～2022年3月 月3回月曜日 開催回数21回 延べ参加者数 62人

子どもとの関係性の構築・5教科のサポートを行う。日々の学習のサポートから受験対策をおこなう。

高松市内には中学生対象の高校受験・進学対策を目的としている学習支援教室や無料学習会はあるが、香川県高松市においては、不登校経験や傾向を持つ子どもたち、経済的困窮世帯やひとり親の家庭に育つ子どもたちを対象とした高校進学後の無料の学習支援の機会

ありませんでした。小中学校での不登校経験を経て、高校進学は叶ったものの、学習についていけなくなったり、通学を継続することが難しくなり、再び不登校状態や中途退学を余儀なくされるケースがありました。当団体の居場所づくりなどを通して出会った子どもたちに対して途切れのない伴走支援をおこない、学校生活や学習面での困りごと、孤立を防ぐために中学3年生から高校生（高校生の年齢層または通信制高校に通う子ども）、高卒認定を目指す子どもたちの学びの場をつくりました。

不登校状態の中学生（受験生）や通信制高校、定時制高校に通う子どもたちが利用しています。活動内容としましては、①関係性の構築 ②学習カウンセリング ③学習支援 ④進学・就職に関するキャリア支援 ⑤食事支援となりました。特に、不登校の状態が長く続き、高校進学を目の前に、進路選択をしていく必要がある中学3年生にとって、自身と向き合い、自分の興味関心や得意不得意を整理し、将来の目標や夢に向かって一步を踏み出すことは、新たな環境での挑戦、はじまりの機会となるのと同時に大きな不安を抱える時期でもあります。丁寧な関係構築や学習カウンセリングを継続し、本人の希望する進路に合わせた学習支援をおこないました。学習会の後には、みんなでおにぎりを作って食べる食事支援もおこないました。地域住民のボランティアの方が毎回あたたかいお味噌汁をつくるお手伝いをしてくださり、参加している子ども若者たちと、学習支援ボランティアや食事支援ボランティアの人たちとのゆるやかなコミュニケーションの場にすることができました。

高校進学後も、学習会に通い続けることができるということで、身の回りの環境が一新していくなかで、安心して過ごし、学校生活や学習などについて相談できる大人の存在があることが、心理的安全性を生み出すことにつながり、学習や通学に対する意欲の向上と維持にも効果的だとわかりました。



(ウ) キャリア教育・体験活動

—2021年4月～2022年3月 実施回数4回 延べ参加者人数 67人

子ども若者のニーズをもとに職業講話や職業体験を季節ごとに開催しました。春には体験活動で女木島に向かい、サイクリングや山登り、ビーチクリーニングを行いました。また、ももカレッジでは児童精神科医をゲストに迎え、どのような人生を歩み、医師を志したのか、悩みや葛藤、今後の希望などを子ども若者との対話をおこないました。ご家族からの参加希望の声を多く、子どもも大人も混ざってともに学び合う機会となりました。

夏には、小豆島へ交流会をおこないました。小豆島で活動されている小豆島子ども若者支援機構ショウ'zさまへ訪問し、子どもたち同士での交流をおこなったり、地域ごとに異なる子ども若者を取り巻く環境の課題などを共有したりしました。

秋には哲学対話をおこないました。キャリアコンサルタントの方をゲストに高校生を中心とした参加メンバーで「普通ってなんだろう？」というテーマでの対話をおこないました。自分の意見も他者の意見も否定しない、自分や相手の声にゆっくりと耳を傾ける経験は初めてだったという声が多く、正解を求めてしまいそうになる中で、自分の考えや思いを言語化することができた。という感想がありました。心理的安全が守られたなかでの対話を経験し、高校生が中心となったプロジェクトも始動しました。



(3) 暮らし支援事業

(ア) りこのキッチン (子ども食堂)・フードパントリー

一月2回 第2・4土曜日に実施 (場所 太田南コミュニティセンター)

子ども食堂…年間開催回数 24回 利用者数延べ 1080名

フードパントリー…年間開催回数 24回 利用世帯数延べ 312世帯

居場所の元利用者である若者が、自分の得意なことをいかして、子どもたちに「ごはんあるよ。いつでもおいで。」を合言葉に居場所をつくりたいという思いから立ち上げた子ども食堂。子ども若者が中心となって、準備や調理、お弁当のお渡しなどをおこなっています。夏には子ども食堂フェスタを開催し、お弁当の受け渡しに加え、チョークアートやみんなの作品展 (絵など制作物の掲示)、科学実験教室などをおこないました。また、国際交流やダンス教室など、地域の方々と交流をおこないながら活動の輪が広がっています。8月と9月は活動場所のコミュニティセンターが閉館したため、駐車場にてフードパントリーを実施いたしました。10月以降は、通常通り営業を再開しました。

小学生から高校生、大学生の若い世代のボランティア割合が6割を超え、調理もお渡しもお楽しみイベントにも挑戦しています。子ども食堂を利用しているご家庭の方々に加え、ボランティアとして参加している子ども若者にとっても、活躍の場、地域の居場所となっています。



(イ) もも若者宅配便（物資郵送）

一年間 12 回実施。 延べ利用者数 49 人。

経済的困窮状態にありコロナ禍の影響を強く受けているご家庭や一人暮らしの卒業生に向けた食糧郵送の実施しました。お手紙や状況が把握できるように公式 LINE の登録チラシを封入。コロナ禍でアルバイトが減少したり、一人暮らしで食費を削減せざる負えない状況に陥ったりする若者への食糧や日用品の郵送をおこないました。

長引くコロナ禍で、県外で一人暮らしをしている若者は帰省もできず、アルバイトもできず、自宅で一人で過ごす時間がほとんどでした。新たな人間関係の構築や出会いの機会も少なく、戸惑っているとの相談もありました。状況が緩和されるにつれ、孤立感は和らいでいき、学校への登校が再開されたり、アルバイトやサークルなどに参加できるようになったという報告もありました。

ご家族やご本人が基礎疾患をお持ちの場合、通常よりも外出や他者との接触に対して、不安が大きくなる傾向がありました。食糧物資を郵送で届けた際は、お礼や近況報告のご連絡をいただいたり、直接ご自宅にお伺いし物資をお渡しできた際には、家庭内の状況や心理的な変化についてお顔を見ながらお話をきかせていただくことができました。疾患や障害などから、子ども食堂やパントリー、居場所に出向くことが難しいケースもあり、定期的にご自宅やその近くの施設などでお会いするアウトリーチは、孤立感を下げ、些細なことでも話しやすい機会をつくる重要なアプローチであると感じています。

(ウ) ショートステイ事業

2021年8月～2022年4月 実施回数 21回 延べ利用者人数 35人

一時的に休息、食事、必要に応じて相談ができる生活支援・相談支援の場として宿泊機能を持つ子ども若者の居場所づくり事業

ショートステイの環境を整えることができました。睡眠や仮眠をとるためのベッドルームを設けることができ、子どもたちは安心して休息をとることができました。はじめは居場所づくりをしている部屋で畳に布団でしたが、新しく部屋を掃除し折り畳みベッドを導入させていただきました。

ショートステイは月1、2回ほど実施しました。合計8回。また8月は静養のため女木島のゲストハウスに1回宿泊しました。食事会は月に2～5回実施しました。合計21回実施。コロナの感染拡大状況や利用者の体調に応じて、お弁当をつくり家まで宅配しました。学校や仕事、デイサービスを利用をしている方々も週末は一人で過ごす場合や家庭内で居場所がなく気持ちが落ち込んでしまう方が多いです。当団体のショートステイや食事支援を利用し自傷行為の回数や頻度が軽減されました。宿泊のことを保護者に言えない子どももいました。その場合は、個別でお話をしたり、一緒に食事をとったりしてゆっくりと過ごしました。安心できる環境で、食事や仮眠をとることで、気持ちが落ち着いたり、自身の心身の不調や、学校や家庭の悩み事を少しずつ話せるようになっていきました。

学校やデイサービスをはじめとする支援機関と連携をおこないません。病院、デイサービス、訪問看護などの担当者が集まるケア会議にも参加し、公的な支援や、福祉制度だけではフォローしきれない部分をショートステイや食事支援、それに合わせておこなう相談支援で対応していきました。発達障害や精神疾患を持つ方が多いため、大人数で過ごすことにストレスを感じやすいが、スタッフとともに2名～3名ほどで過ごすショートステイなら安心しやすいことがわかりました。特に年末年始や年度末など行事ごとがある時期は、自分と他の家族を比べて気持ちが辛くなってしまいうケースもありました。精神的にも経済的にも、孤独を感じやすい時期にショートステイを実施することができ、自傷行為の軽減や自殺予防の観点からも大きな成果があったと考えられます。



(4) 相談支援事業

(ア) 個別面談 年間実施回数 104回 延べ利用者人数 42人

不登校や発達障害、経済的困窮世帯など様々な背景にある子ども若者やそのご家族との個別面談を実施しました。学校に行けなくなっていてどうしたらよいか困っている。子どもも保護者も体調不良が続いているが病院を受診した方がよいか。など相談内容は多岐にわたりました。適切に医療や福祉とおつなぎし、相談先や支援機関との顔の見える関係づくりをサポートしました。すでに、医療機関や福祉施設を利用している場合にも、病院や学校、カウンセリングに加えて、他者と関わる機会をつくりたい、同世代や似た境遇にある友人と話してみたいなどの相談もあり、当団体の活動をどのように利用していただくことがご本人の心理的安全や社会的自立に向けた伴走となりえるかを相談、検討していきました。

当団体には子ども若者から直接相談が寄せられることもあります。家族や学校には言いにくい悩み事や困りごとについて、話したいという傾向があります。希望される方に対して、対面や電話相談などを定期的におこないました。当団体の居場所等を利用している不登校や若年無業状態の子ども若者の約9割がなんらかの精神疾患や発達障害、自傷行為の傾向があります。すでに適切な支援を受けてはいるが、治療やカウンセリング、訓練を目的とした場としてではなく、よいときもそうでないときも自分の思いや状況を話すことができる機会として、個別面談を希望される方が多いということがわかりました。私たちは子ども若者の心身の状況やご家庭、学校での様子をヒアリングし、必要に応じて医療や福祉などの専門機関との連携をはかりながら、ご本人やご家族にとって孤立を防ぎ、安心できる場や他者との出会いふれあいの場をつくることを目指しています。

(イ) 訪問支援・同行支援

年間実施回数 52回 利用者人数延べ14人

不登校や若年無業状態の子ども若者の精神的・身体的状況の悪化がある場合、家族にタ著ることができず、自身で病院に通院する事が難しく、薬がなくなってしまったり、買い物に行けず食べ物がなくなってしまったりするケースがありました。福祉サービスの利用を希望される場合には、その手続きのための移動や窓口での相談に付き添い、ヒアリングやモニタリングに同席しました。手続きをおこなっている間の病院や買い物などの同行支援、ご自宅への訪問支援を継続しておこないました。自傷行為や生活面の難しさが大きい時は、当団体のショートステイの利用につなげるなどの対策をとりました。

無事に福祉サービスの利用が開始でき、訪問看護やデイサービスを活用しながら、個別面談や居場所、ショートステイの利用を希望に応じて継続しています。

(5) スタッフボランティア研修

年間4回実施 参加者人数延べ 65人

スタッフやボランティアの参加人数が増えきている中で、チームビルディングを目的とした交流会や、自殺予防の勉強会、児童精神科医を招いた子どもと大人の関り方の勉強会・座談会、同県内で居場所づくりをおこなっている団体への見学・勉強会をおこないました。直接的にボランティア活動に参加する時間に加え、気づきや戸惑いなどを共有する時間を設けたり、関わる子どもたちの背景や強みをよく観察し自分たちにできるコミュニケーションはどんなものがあるかを考えたりしました。

将来、教育系や福祉系の職業に就くことを希望してボランティアに参加している高校生や大学生も増えています。直面した課題を一人で抱え込むことなく、また自身の考えを押し付けることなく、子どもたちに当団体ができることは何かを改めて考える機会となりました。子ども若者支援に携わりたいと考えている学生たちの学びと実践の場として、さらに成長を促進していきたいと考えています。



(6) 不登校生徒に向けた通信制高校のパンフレット制作

香川大学医学部 鈴木裕美教授とともに「ハイスクールプロジェクト」を立ち上げ、不登校状態にある中学生に向けた通信制高校や定時制高校の情報、先輩の声などが掲載されているリーフレットを作成しました。不登校の中学生が進路を検討する際に、通信制高校や定時制高校の情報がわかりにくく、不登校の生徒やそのご家族にとって情報収集する負担が大変大きいこと、学校によって情報量の差が大きいことがあげられていました。当団体のOB・OGにもヒアリングに協力してもらったり、リーフレットの表紙のイラストを、当団体の利用者が担当したりしました。子ども若者とともに作り上げたリーフレットは県内の中学校全校に配布されました。



【2】2021年度の採択・助成実績

2021年4月～9月：中央共同募金会 with コロナ 草の根活動応援助成 第3回助成
2021年度：一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団「住まいとコミュニティづくり活動助成」
2021年度：一般財団法人カゴメみらいやさい財団助成
2021年7月～12月：むすびえ・こども食堂基金 Aコース(食材支援)
2021年9月～2022年3月：社会福祉法人 読売光と愛の事業団「子ども育成支援事業」
2021年9月～2022年8月：NPO法人モバイル・コミュニケーション・ファンド「ドコモ市民活動団体助成事業」
2021年9月～2022年3月：高松市つながりの場づくり緊急支援事業
2021年11月～2022年12月：一般財団法人チャイルドライフサポートとくしま「子どもの笑顔はぐくみプログラム」
2022年1月～2022年3月：むすびえ・こども食堂基金 ファミリーマート&むすびえ助成事業

【3】メディア掲載など

2021年7月23日(金・祝) NHK高松「ともにつくる改修プロジェクト DIT ワークショップ」を取材
2021年7月22日(木・祝) ケーブルメディア四国「ともにつくる改修プロジェクト DIT ワークショップ」を取材
2021年8月31日(火) NHK高松「夏休み明け子どもの居場所」
2021年8月31日(火) KSB瀬戸内海放送 「もものバー」を取材
2021年9月6日～ケーブルメディア四国
2021年9月29日 読売新聞香川県版 ショートステイについて取材
2021年10月18日(月) 四国新聞
2022年1月28日(金) 読売新聞 特集「つながる手 子どもの居場所(上)」
2022年1月29日(土) 読売新聞 特集「つながる手 子どもの居場所(下)」
2022年2月8日(火) NHK高松 ゆう6かがわ コロナ禍の不登校の実態について

